

東古渡町遺跡

第6次発掘調査報告書

1999年3月

例 言

- 1 本書は、東古渡町遺跡第6次発掘調査の報告書である。
- 2 調査地点は、市道新尾頭金山線のうち熱田区金山町一丁目地内（道路）である。
- 3 調査は、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）内にガス管理設工事を計画した東邦ガス株式会社の依頼により、名古屋市教育委員会文化財保護室との調整の結果、同教育委員会が受託し、名古屋市見晴台考古資料館学芸員服部哲也、水野裕之が担当した。
- 4 調査は、埋設管工事に伴い、約13～2.0m幅の延べ約180mを対象とし（面積約300㎡）、平成10年5月10日～6月7日の期間で行なった。
- 5 出土遺物および記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
- 6 本書の作成にあたり、同考古資料館の伊藤正人、村木誠の協力を得た。
- 7 本書は、発掘調査担当者の協力を得、水野が執筆した。

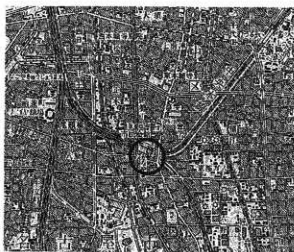


図1 遺跡位置図

目 次

- 1 遺跡の概要
- 2 調査の経過
- 3 調査の概要
- 4 まとめ



図2 遺跡範囲と調査位置図（A～D間）

1 遺跡の概要

東古渡町遺跡は、縄文時代から近代にいたる遺跡である。1987（昭和62）年からの市教育委員会の調査によって、弥生時代後期から古墳時代にかけての方形墳を主とした墓域であったことがわかり、名古屋の古墳時代を語るうえで欠かせない遺跡として知られている。現在の遺跡範囲の北側には、正木町遺跡、伊勢山中学校遺跡という古墳時代から古代にかけての大規模な集落跡が存在し、その南側に位置する名古屋最古の古代寺院であった尾張元興寺跡とともに、熱田台地西側に展開する大遺跡群の様相を呈している。

なお、現在鉄道線路になっている谷地形は、本来、ほぼ同じ高さの台地が続いていたところを近代になって開削したものであり、「副都心」と呼ばれ再開発が盛んに行なわれる地域だけに、広範囲にわたると推定される遺跡群の状況を把握することが、当地方の歴史文化を未来に伝えるうえで大切なことであろう。

2 調査の経過

東邦ガス（株）による100ミリ管（中圧管）の埋設工事が、当遺跡範囲の南側にあたる道路敷部分に計画され、埋蔵文化財の取扱について市教育委員会文化財保護室と東邦ガス（株）との調整がおこなわれた。その結果、発掘調査を市教育委員会に委託する手続きを経て、今回の調査が実施された。

調査地が市営バス路線でもあり、交通量の多い通りであることや、道路占用および埋設工事作業の関係から、基本的には東から西へむかって進むという一日毎のガス管工事工程に連動して調査を行なった。結果的には、土層等の記録を中心に、遺構、遺跡範囲の確認を主目的としたものとなった。



写真1 金山南ビル地点の発掘調査（平成元年度）

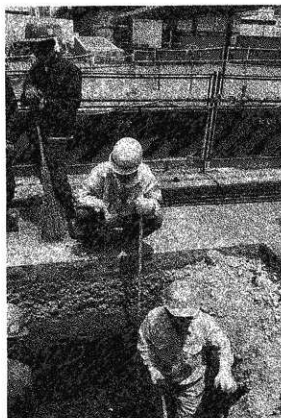
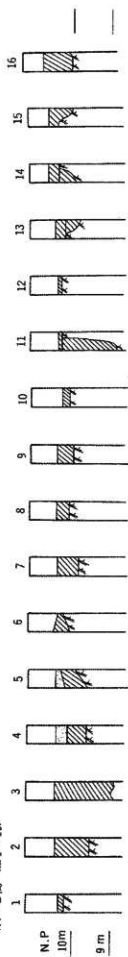
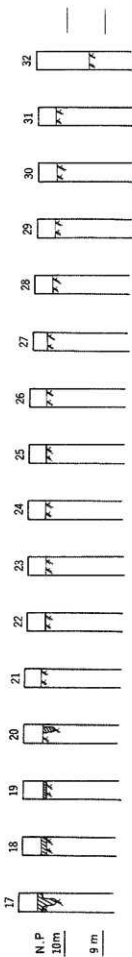


写真2 今回の調査状況

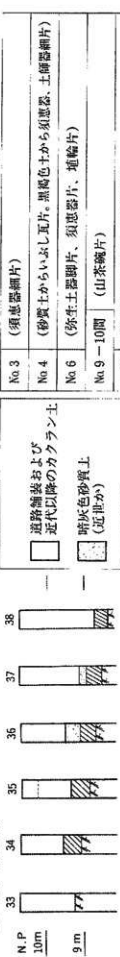
〈A-B間 No.1~16〉



〈B-C間 No.17~32〉



〈C-D間 No.33~38〉



〔遺物出土地点 (上層図のNo.) および内容〕

No.3	(須恵器細片)
No.4	(砂質土からいよし瓦片。黒褐色土から須恵器、土師器細片)
No.6	(弥生土器脚片、須恵器片、通輪片)
No.9-10間	(山茶碗片)
No.10	(細文土器口部片、山茶碗片)
No.11	(遺構から山茶碗細片)
No.14	(遺構から須恵器片、古代瓦片、土器細片)
No.34	(近代の層から幕末頃の陶器片)

道路舗装および近代以降のカクラン土
 暗灰色砂質土 (近世か)
 黒褐色土 (遺構を含むまたは遺構埋土)
 地山 (熱田層)

図3 調査区間の土層断面模式図 (当図のA-D間は調査区位置図(図2)のA-D間の記録である)

3 調査の概要

遺跡範囲の南東部および、その外側へ伸びる位置にあたる今回の調査によって得られた成果のひとつに、南東部の遺跡の広がりを知る手がかりを得たことがあげられる。南北方向に細長く伸びる熱田台地の一部を東西に横断するトレンチを設けたかたちの調査区によって、図2のAB、BC、CD間の地山（遺跡の地盤＝熱田層）上面の深さは、AB間で海拔10.20～10.30m（NP）、BC間で10.50～10.20m、CD間で9.30～8.40mという数値であった。それほど極端な地形の変化ではないように思われるが、調査区内の中央付近では、今回の調査のなかでは最も高位で地山が検出され、しかも、包含層および地山の最上層にみられる粘性のある黄橙色土部分も滅失した状態であった。これは本来（江戸時代以前か）、BC間付近で少なくとも数10cmはさらに高くなり、西側では緩やかに下がり、東端では1.0～1.50m以上も下がる地形であったと思われる。これまで遺跡分布図では、柱状図No.13あたりまでが推定範囲であったが、さらに2.5mほど東方（柱状図No.20あたり）まで遺構が検出された。ただし、遺物については、現在の遺跡推定範囲にはほぼ収まっているという結果であった。包含層あるいは何らかの遺構埋土と思われる黒褐色土からは、土器片類の遺物が出土したが、今回の調査では、遺構の種類、性格、規模を判断することができなかった。ただし、出土遺物の種類は、当遺跡が各時代に渡っているというこれまでの発掘成果ともよく一致した。

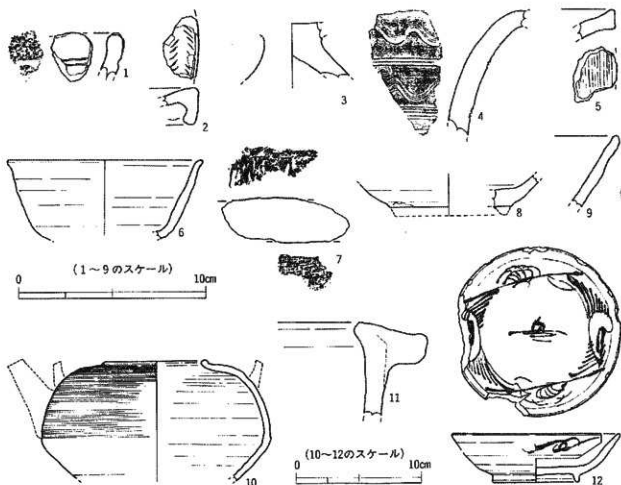


図4 主要出土遺物実測図

表1 主要遺物一覧（番号は図の番号に対応する）

番号	出土位置	機種名	時期など
1	No.10 黒褐色土包含層	深鉢か	縄文時代後期初頭か 口部片
2	No.14 “	壺	弥生時代後期(山中式) 口部片
3	No.6 “	高坏?	弥生時代後期 脚部片
4	“ “	須恵器甕	5世紀 口部片
5	“ “	埴輪(朝顔型か)	5世紀末～6世紀初 口部片
6	No.14 “	須恵器坏	
7	“ “	平瓦	
8	No.9-10間 遺構埋土	山茶碗	12世紀後半か 底部片(高台剥落)
9	No.10 黒褐色土包含層	“	“ 口部片
10	No.34 カクラン土	錆軸糸日上瓶	19世紀前半 瀬戸美濃陶器
11	“ “	甕	“ 常滑
12	“ “	呉須絵皿	“ 瀬戸美濃陶器

発掘調査	時代	旧石器		縄文					弥生		古墳		奈良	平安		中世		近世	
		草	早	前	中	後	晩	前	中	後	前	後	前	後	前	後	前	後	
1～5次調査までの成果							■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
今回(6次)調査の成果							■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

図5 東古渡町遺跡の時期的な内容

□ 遺構・遺物を確認 ■ 遺物を確認

4 ま と め

今回の調査によって、遺跡南東部の状況がある程度知ることができたことと、出土遺物の内容が、これまで知られていた遺跡の時期幅によく一致したという主に二つの成果があった。

通常、遺跡の範囲確認調査は、都市部では行なうことが困難であることから、今回のように遺跡内の一部を横断するトレンチ(試掘溝)調査のようなかたちになったことは、貴重な成果であるといえる。その結果、遺跡南東部では地形によって遺跡の範囲が規定されている可能性が高いと思われ、逆に今までは調査していない遺跡の南部、西部、北部がどこまでの範囲かという課題を持つに至った。

最後に、今回の調査が、その日の埋設管工事の直前に記録保存をはかるといふ、やや変則的な形となったが、現場の工事関係者の方々の協力が無くてはできないものであったことを明記しておく。

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひがしふるわたりちょういせき だい6じはくつちょうさほうこくしょ							
書 名	東古渡町遺跡第6次発掘調査報告書							
編集者名	水 野 裕 之							
編集機関	名古屋市教育委員会							
所在地	〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1-1 TEL.052-972-3268 FAX 052-972-4178							
発行機関	東邦ガス株式会社							
所在地	〒456-8511 愛知県名古屋市長久区桜田町19-18 TEL.052-871-3511							
発行年月日	西暦1999年3月1日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ° °	東 経 ° ° °	調査期間	調査面積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
東古渡町 遺跡	愛知県名古屋市 熱田区金山一丁目 目地内	23100	7-23	35度 08分 20秒	136度 54分 15秒	98.5.10 ～ 6.7	約300㎡	ガス管理設工事
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
東古渡町遺跡	築窯跡 古墳跡	縄文～近世		土坑または溝 ピット		縄文土器、弥生土器、 須恵器、中世陶器、近 世陶器片		